

一 少年時代

私が生まれたのは昭和二年（一九二七年）七月八日の昼近い時刻のようで、その時家の者は皆畑に出ていて母だけが家に居たようで、俄かに産けずき、経験上これは間近いぞと感じたので隣に駆けて行き、一人だけ家にいた分家の爺さんを俄か産母になるよう頼み、大急で家に戻り分家の爺さんの介護で安産したとのことで、如何に昔のこととは云え、男産母の介護でこの世を見ることが出来たという例は余り多くはないのではあるまいか。

昭和二年という年はアメリカ大恐慌の二年前のことであり、日本では銀行倒産が続出した金融恐慌の時代であり不景気の真最中であつた。

私は岩手県の南端の東磐井郡門崎村大字千手堂四十九番地の一という所に生まれた訳であるが、北上川東側の山々に囲まれた小さな村であり、田んぼが少なく山畑ばかりある貧乏な山村で、その中でも一二を競うほどの貧乏小作の家であり、まさに極貧洗うが如き家庭が我が家であり、貧乏屋の通例として子沢山であり、私は九人兄弟姉妹の中の三番目であつた。尤も、そのうち二人は幼い頃に死亡してしまつた。

私の子供の頃は大麦が七割、米が三割というのがこの村の標準的な食事であり、これに大根が穫れる季節ともなると大根を細切りにして入れるのであるが、これを大根飯（通称、カテ飯と云つた。）と称し誰もが嫌がった。麦飯ですら口の中に入れると麦の筋が口の中に残り、吐き出したくなるのに、それに大根が入ると、その青臭い匂いが加味されるからたまつたものではない。

味噌汁は自家製の味噌を用いるが裕福な家では二年味噌、三年味噌と云つてじっくりと塾成した味噌を用いるから美味しい味噌汁となるが、貧乏屋では二年も三年も味噌が熟成するまで待てないので白い内に食べるから、これを「貧乏者の白味噌」と云つて貧乏の象徴として皆で馬鹿にしたのであるが我が家ではいつも白味噌であつた。

おかずは塩辛い大根の漬物と相場が決まっていたが時たまに鯨などが食卓に乗ると大喜びをしたものである。当時は鯨は「猫またぎ」と云つて猫すら食わない魚とされたのであるが、それでも貧乏屋にとつては大変な御馳走だったのである。

一体、私の母は生まれて間もなく実母を亡ない、その跡に來た継母にいじめられ、それを見兼ねた父が東京のさる大家の女中として送り出し、そこで五年もみっちり家事一般を修業しており、所謂、東京風の料理の仕方をみっちり仕込まれていたのので、料理には相当の自信を持ってをり、事実、後年になり生活に若干の余裕が出來る頃になると美味しい料理を作るようになるのであるが、貧乏花咲かりでは腕を發揮する状態ではなかつたのである。

近年の若者達はみな背が高く、顔立が立派になってきているが、その最大の理由は栄養の良さにあると云われている。これに對して当時の子供は背が低く、人相も悪く一様に青っ鼻を垂らした子供が多かつたし、寝小便を垂れる子供も多く、相当の臭い

を発するので一緒に遊んでいてもこの子は寝小便垂れだなどすぐ気がついたもので私もまたその一人であり、いつも青っ鼻を垂らし寝小便をした。尤も、私の寝小便は毎晩という訳ではなく、時たま漏らす程度だったので余りひどい方ではなかった。

私の母方の母、つまり外祖母は同じ村から一の関の田村藩の藩士で鉄砲組頭三十石二人扶持の家に養子夫婦として入った人で、その相手となった人、つまり夫は私の曾祖父の弟に当る人で私が子供の頃まで生きていたので今でもうっすらとその面影を覚えていたが背の高い立派な顔立のお爺さんであった。これに對して、その祖母は相当の不美人であったようである、その証拠に私の母も祖母に負けないほどの不美人であるが、その母が私のことを『余りにも人相が悪いのでおんぶして町を歩くのが恥かしかった。』と云うのであるから私がどれ位可愛げのない子供であったか想像がつく筈である。その可愛げのない子供が右の目尻に腫れものが出来たが貧乏なので金と暇とがなかったので放置していたら跡に傷跡が残って一層可愛げのない顔をした子供になってしまった。不思議なもので、その傷跡を少年時代にまた負傷し、さらに青年時代に酒に酔って転んだ拍子に眼鏡の破片が同じ所にささってまたも傷を負い、最後は五十を過ぎてから冷蔵庫の端に当って同じ所を十三針も縫うという大怪我をしたのである。私の劣等感の構成要因の中にこの傷跡が相当のウエイトを占めているようである。

ところで、村一番という貧乏家から田村藩の鉄砲組頭の家で明治以後は士族の家柄で地名が千刈田といい、何町歩かの田畑を持つ家に養子に行くことは如何に士族が落ぶれたと云いながら納得の行かない話と思うかも知れないが、あながち唐突なことではない。私の家は私の父の代で三十七代目という村一番の旧家であり、先祖の館跡が花館という地名で今に残っているし、鎧、兜、鎗、大刀、小刀、脇差、馬具などが一式今でも残っており、最近その刀を研磨したら、大刀には月山則信という銘があり、これは岩手県には二振りしかない銘刀であり、しかも、もう一振りも出来がないので文化財として申請しなさい、というのが研磨師の推薦の弁である。

どうも、義経の家来の一人のようで今に伝わる白地を赤枠で囲んだ旗差物は義経から拝領したものと謂われている。

江戸時代には名主もしており、田畑十数町を所持する大百姓であり、分家も十数軒あり、その分家では今でも私の家のことを本家と云わず庄屋と呼んでいる。

また、家の前方に大きな寺院があり、それが文治五年の平泉滅亡の際に焼失したが仏像が半焼けの形で残っていたので、それを小さな堂祠を作って祭っているのが我が家の自仏堂であり、その中に平安時代作と謂われる焼けた木造仏六体（背の丈は約二メートルもある大きな仏達である。）と銅を素材とした千手観音像一体とがあり、このことからこの部落を千手堂部落と称し、私の家の屋号は千手堂屋敷と呼ばれている。

このようにして明治までお大人として暮らして来たのであり、一の関田村藩士の家に養子に行った人の兄が千手堂高橋家を継承し、かたがた村の助役や村長を長く務めていたが、この人の名を教七というのである、当時の村人はこの教七のことを、

「我が村のおさは役場で花札あそび、今日賃おいて明日何食う」

と花札賭博ばかりしていて負ければ田畑を売り飛ばし、質屋通いをするようでは教七おいて明日は何を食うのだろうかと揶揄するほどの放蕩者であるが、村長がこのざまなので村会議員も負けてはいられない、

「議員さま日当わずかに五十銭、一円呑んで今日も村会」
というのが当時の村政を支配する人達の姿であったという。

このようにして名村長教七殿は田畑十数町歩、山林数十町歩という財産を全部売り飛ばし、拳句の果に敷地約千坪、間口十二間、奥行八間の主屋、家の前には中門付馬屋を建て引越したが秋口になって台風が来たとき一挙に壊滅してしまい、やむなく、売り残った山端に再度小屋懸けしたがこれも数年後に大雨の際に壊滅してしまつたという。業を煮やした教七はその山端の下側の地番を四十九番地の一と役職を利用して改正し、皆の反対を押し切って西向きに家を建たとのことであるが自棄のやんぱちとはこのことである。かくしてこの名村長は梅毒を病み大正七年に死亡したが彼の枕元から出たのは僅かに金五円也であつたという。彼が一代で食い潰した身代は今の金額にしたら十億を越すのではなからうか。

ところで教七の死後の千手堂家のことを人々は次の狂歌で示している。

「教七の亡きあとこそは修羅場なり、借金取りが先を争そう」

という状態となり、我れ先にと手当り次第に目ぼしい品を持ち去つたから、
「教七の孫共のさまあわれなり、今日も軒ばでびいびいと泣く」

と不慙がったという。こんな状態でも刀類が残つたものだと思つのである。

これが高橋家が村一番の貧乏を誇る理由であり、だから私が育つた頃は極貧の最中でありながら武士は食わねど高揚枝的な変に高踏的などころがあり、瘦我慢的賤を強要されたような気がする。

特に私の母は父つまり教七の弟によつて急拠東京から呼び戻され、高橋家存亡の時に教七の孫隆一の嫁となり高橋家再建の為に懸命の努力を払うように命令されて必死の覚悟で嫁入りしたとのことで、士族としての誇りと高橋家再建の意気込みとがミックスしていたようで大変に厳しい賤を強制された。

ところで、この不美人で誇りだけ高い母すらがおんぶして歩くのが恥かしいと云つた子供は毎日に大変な悪戯野郎に成長し目に余るよになつてきた。

今はもう建替えたのでなくなつたが、私が育つたころの家の大黒柱は鉈で切り付けた傷跡が随所にあり、また、囲炉井を囲む艶々した桜の木で作つた太い板組にもいたる所に鉈の切傷が残っていたし、台所と中の間の仕切戸の裏には目茶苦茶に塗りたくつた墨の跡が残っていた。また、居間の床板には私が彫刻刀で汚らしく高という字を彫りつけていたし、その度に父に拳骨で殴られたとのことであるがそれは記憶にない。また、気に食わないことがあるとすぐ家の外に飛び出しては庭の小石を家めがけて投げるので障子紙が破れて困つたと母がこぼしていた。

昭和九年に小学校に入学したが悪戯は益々激しくなり、悪童との評判が高くなつた。私の級は三十数名だけの一組で小人数であつたが、その中に信一と公男と精一の

三人の悪たれがおり、先生は誰かが悪戯をすると『信一か、精一か、公男か』と云うのであるが大体の場合この三人の内の一入であることが多かった。

私の悪たれ振りには小学二年から本格化する。この年の担任は橋本という女の先生で私と同じように右の目尻に傷跡があったが、そのためかも知れないが随分といじめられた。どう云う訳か秋男という子といつも同席であり、橋本先生はこの子の離れ屋敷に間借りしていたので秋男には優しくした。その秋男は大変な笑い上戸であり、一寸したことでもすぐ笑うので、私が何か話すとすぐげらげらと大声で笑い出すのであるが、すると橋本先生は必ず私を立たせるのである。特に唱歌の時間には階段下の倉庫の中に私を入れるのが習慣になってしまい、お蔭で私は二年生の時の唱歌というものを知らないでしまった。

私のすぐ下に二人の妹弟がいたが幼くして亡くなってしまい、次の弟は七つ違いであり、遊びの相手にならないので分家の子供で私の一つ年下の実という子で通称ミコちゃんという子と、これまた分家で私の取上げ爺さんの孫である弘という子が私の子分であり、学校から帰るとこの二人の子分を従えては悪さをするのである。

当時はお菓子を買って食べるなどということは何かの祭の時以外はあり得ないことであり、おやつは家の付近に植えてある山桃、杏、山梨、びっくりぐみ、栗、柿それに梅などを季節順に取って食べるのが子供達のおやつであるが、私の父はどういう訳か、この成り物の木が大嫌いであり、方々端から切り倒すので我が家には栗と柿の木以外は一本も成り物の木はなく、やむなく他者の家の成り物を盗むことになるが、何時も三人で盗み食いしたので次第に泥棒の腕が上達し、付近の成り物のある家から警戒されるようになった。

また、何処の家でも冬になると餅を搗き、それを巾三センチ、長さ十センチ、厚さ二センチ位に切り、それを藁で十こぐらいを連らねて編み、これを一連というのであるが、百連も二百連も作って軒に釣り下げ寒気で凍らせると凍り豆腐と同様に長持ちできる食品となるので、春先きの何もおやつのない頃には格好のおやつとして子供も大人も食べたもので、この餅に煎り豆を入れたり、よもぎ葉を入れたり、おからを入れたりして味に変化をもたせたり、餅米の節約をしたりするのであるが、おからを入れたのは見た目はよいが味が悪いので、これを「きらじ餅」と云って馬鹿にしたものであり、人相はよいが余り頭のよくない人も「きらじ餅」と云われて馬鹿にされたものである。当然のことながら我が家の乾し餅にはこの「きらじ餅」が圧倒的に多く、子供心にもどうして家の乾し餅はきらじ餅が多いかと嘆いたものである。

この乾し餅を盗むことにかけて私は天才的な才能を示したのである。私の家の前には鬱蒼たる竹林があり、そこから手頃な竹を切り出して竹馬を作るのであるが私が作った竹馬は地上三メートル位の高さであり、後の崖からでない竹馬に乗ることができなかつたが、乗ってしまえばこっちのもので軒下の乾し餅や、乾し柿を盗むのに適切な高さなので手当り次第に盗んでは絆纏の裏に自分で作った大きなポケットに入るだけ入れて逃げてしまい、夕方暗くなるまで遊び回り何食わぬ顔で家に帰ったものである。

また、歩いて七・八分の所に砂鉄川という川があり、川巾は二十メートル位であるが水量が豊富な川が流れていた。ここは私の格好の遊び場であり、魚釣りは当然として蟹釣りをして楽しんでんだものである。蟹釣りは比較的太い竹竿に細い縄を付けてみち糸とし、適当な石を重りとし、その先に蛙の皮を剥ぎ、それを結びつけ岩蔭にそっと垂らして置くと甲羅が十センチもある大きな毛蟹が食いついてくるのであるが水面から上に挙げるときが勝負時であり、水面から間髪を入れずに引き上げるのがこつである。大体、三・四回に一度くらい割で釣れば名人なのであるが私は名人の部類に入っていた。

ところが、私は子供の頃は魚類が大嫌いであり殆んど食べなかつたので、ビタミン不足から夜盲症になったことがある。母が心配して肝油というものを買ってきて吞ませるのであるが、その嫌な味を今でも記憶している。そんな訳で魚や蟹は釣るだけであり食べたことはなかつた。

私の村は旧伊達藩領であり、七夕祭りが盛大であり何処の家でも太い孟宗竹に満艦色に色紙や吹き流しを飾るのが慣れであり、そのためには相当の出費となるのであるが子供たちは徒党を組み、その七夕を夜陰に乗じて切り倒すという悪質な遊びがあり、そのため子供たちは夜を徹して自分達の七夕を守るのである。

小学校の高等科一年の時だったと思うがミコちゃん和弘と、それに三郎ちゃん（三郎チャンは今ではソニーの会計課長をしている）を引き連れて日頃私をこころ良しとしない或る家の七夕を倒すことを計画した。尤も、当時私をこころ良しとした人は余り多くいた筈がないが、とにかく、その家の七夕を是非とも倒すという決意で夜の更けるのを待ち、件の家にしのび入り、この時の為にピカピカに研ぎに研いだ小刀で元杭にしっかりと結びついている荒縄を切り放った迄はよかつたが、余りにも大がかりな七夕だったので倒れるときすさまじい音を上げてしまい、「すわ七夕荒しだ」と家人が騒ぎ出したので、この七夕を田んぼ迄運び出して田んぼの真中に立てるといふ最後の仕上げを完成させることが出来ず、ほうほうの態で逃げるのが精一杯であった。このことも後になって精坊の仕業だと発覚し大目玉を食つたのは当然である。

岩手県には昔から婚礼の夜に、披露の宴たけなわの頃ともなると、覆面をして身元を隠し、重箱と空の一升瓶になにがしかの銭を添えて勝手口にしるのび入り、『お福』『お福』と連呼すれば、それを目ざとく見付けた勝手働きの者が「そら、お福様だ」と兼て用意のあんころ餅を重箱に入れ、一升瓶には酒を入れてお福様に渡すのがしきたりであり、その為に用意すべきお福用の餅も、あの家では五升用意した、この家では一斗だった、とか相当量を用意しなければならず、もし、吝れば『あすこはけちで出さなかつた』としてどのような悪戯をされても文句を云うことが出来ないとされてきた。例えば、井戸に靱殻を入れられて台所働きの人々が迷惑するとか、突然に停電となり披露宴が混乱するとかとなるのである。

後藤新平も若い頃は大変な悪たれで、お福に入っても出さなかつたので、鶏を便壺の中に入れ、それを宴会場に放つたとのことである。

戦後の食料難の時代に岩手県知事国部謙吉は県条例でこのお福を禁止してしまつ

た。

私の頃はまだ支那事変の初期だったのでお福も多かったので例によりミコちゃんとお福とを引き連れて、おシンコさんの婿取り婚礼にお福に忍び込むことにし、顔を手拭で隠し、マントを着て重箱に金五銭を添えて出入する人蔭を避けながら勝手口の戸の裏側から『お福』『お福』と連呼したら、『それお福だ』と誰かが答え、件の重箱を私から受取り、間もなくあんころ餅を一杯入れた重箱を渡して呉れたが、側で、『あの声は精坊の声だ』と云う人がおり、這々の体で逃げ帰ったことを覚えていた。

勉強の方はさっぱり出来ず、いつもどん尻から二・三番であり、特に操行は丙が良い方でたまに丁という落第しそうな点を貰ったことも屢々であった。何故、ビリにならなかつたかと云うと、昭治という子が一年の時の落第生として私のクラスにドロップして来たので、その子より下に行くことが出来なかつたからである。

後年、子供に對し勉強しなさいと云うと『お父さんの子供の頃は何時もビリだったとお婆さんが云ってたよ』と口答えされるので大いに困ったものである。

同級生に辰夫というのがおり、これも私同様ビリから勘定した方が早い方で小学校高等科を卒業と同時に国鉄に入ったが、これと久し振りに会った時、『お前は本当に偉い。信一や徹哉が中学校の先生になれたのは元々頭が良かったから当然であるが、お前は小学校時代は俺と同じようにビリから一・二であり、それが大学の先生になれたのだから本当に偉い。』と云うのである。このような賞め方もあるのかと妙な気がしたが本当の事なのでニヤニヤと笑うだけだった。

高等科一年の時から煙草を吸うことを覚えた。

例によって、信一と公男とそれから未だ誰かが居たような気がするが学校の裁縫室の天井裏に潜んでプカプカと吹かしていたら、途端にむせてしまいギャホンギャホンと咳が出た時、下の廊下を通っていた生徒が先生に報告したからたまらない。先生が飛んで来て『やい、降りてこい。』と怒鳴るから仕方なく天井裏から降りた奴から順に先生に張り倒され全員ひっくり返ってしまった。それから一日中職員室の中に座らされたのを覚えていた。

この頃になると支那事変も次第に拡大し、食糧増産という訳で学校の農場で農業実習が多くなってきた。

その頃、岩手県で二番目に古く創立されたというので此処の卒業生は皆鼻高々であったが、その農蚕実業学校を卒業した若い代用教員で佐々木公男先生という人が私達高等科の農業の先生として赴任して来たが、どうした訳か、この先生に私は余り叱られた覚えがないし、むしろ蔭で私を弁護さえして呉れた数少ない恩師である。

この先生の指導で学校の実習畑で野菜や里芋、馬鈴薯などを栽培したが収穫が多いと、その野菜や馬鈴薯をリヤカーに積んで、村一番の繁華街であり店屋なども数軒ある駅前売り場に行くのであるが、この販売実習は班単位であり私の班は秋男、公男、重夫、昭三、精一の五人であり、この五人で販売実習に出かける道順は人家の多い役場下は避けて田んぼの中にある桜町という所にまず寄った。桜町という地名にもかかわらず駄菓子などを売る店が田んぼの中にたったの一軒だけポツンとあり、この店の

お婆さんと野菜とお菓子とを交換して、それを食べながら駅前に行き残りの野菜を全部捌いてしまい、何食わぬ顔で学校に帰り佐々木先生に売上金を渡すのである。

後年、私も代用教員になるのであるが、その中学校に佐々木先生がおられたので昔のことをお聞いたら「どうも怪しいとは思ったが聞いただして騒ぎを大きくするほどでもない」と問に附した。「とのお答であった。この中学校に在職中も佐々木先生に色々と御迷惑をお掛けすることになるがそれはまた後で話すことにする。

この温厚な佐々木先生を本当に困らしたことが一度だけある。例により桜町でお菓子を買って買い、駅前で本当の商売をして、その金で農協から肥料を買って学校に帰る途中、ふざけてリヤカーをじぐぐくに走らせていたが砂鉄川にリヤカーごと落ちてしまった。皆で川に入り大急ぎでリヤカーを引上げたが何せ中身は肥料なので溶けてしまい空袋だけとなってしまった。その空袋をリヤカーに乗せ、すびすびと学校に戻り佐々木先生に事の顛末を報告したのであるが、佐々木先生は真赤になって叱ったが決して殴るようなことはしなかった。当時、肥料はお金よりも大切なものであったし、生徒を殴るなどということは教育的にも必要であると誰もが考えた時代であったのに若い佐々木先生に殴られた生徒は一人もいなかった。この佐々木先生もやがて軍隊に行ってしまった。

小学生時代最大の事件は私達が高等科二年の時のストライキ事件である。昭和十六年ともなると支那事変は大東亜戦争突発寸前の緊迫した状態に高まっており、小学校も軍事色一色となり厳しい指導がなされた時代であるが我々はよくストライキをしたものだと同級会の折に話題となる。

事件の発端はいたって簡単である。私達高等科二年生は朝から晩まで学校の実習畑で馬鈴薯や南瓜作りに精を出し、勉強などは余暇利用程度になってしまった。

ところで、砂鉄川は北上川の支流であり、北上川はよく氾濫したものでその度に逆流が砂鉄川に押寄せ、すると私の村の田畑約二百町歩は水没してしまうのである。

昭和十六年の水害は相当な規模のもので学校の実習畑にも水がひたひたと押寄せて来たので高等科二年生は朝から馬鈴薯掘りに畑に行き、必死になって芋を掘っては学校まで何度も何度も運び出し、作業が終って引上げる頃には腰まで水に浸るほどであった。

そこで学校では生徒の活躍を慰労する意味でその芋を茹ておやつとして食わせたのであり、我々も大いに満足したのである。

ところがである。それから数日して先生方はその芋をテンプラにして大宴会を開催したという噂が我々高等科二年生の耳に入ってきた。これはけしからんことである。あの芋を栽培したのは我々であり、あの洪水から守ったのも我々である。それなのに我々には茹た芋を食わせ、自分等だけテンプラにして食うとは道徳に反する行為であり到底許すことの出来ない醜事である。我々は断固として抗議する。と云う訳でクラス中大騒ぎとなり喧々諤々の話し合いの結果、これから同盟休校をしようということになった途端に十二人の女の子全員それには反対と云いだした。そこで女など問題にしないと云うことで早速学校の裏山にある村社に皆で登り社殿に入り戸を締めて中に

潜んだ。誠に食い物のたたりほど怖いものはない。

この村社は学校のすぐ裏にあり、学校の敷地はこの村社の前の山を削った土を平にして造成したものであり、急な斜面となっていて登るには五十段ほどの石段が社殿の前後二ヶ所にあり、その外にだらだら坂が学校の裏から東方に一本延びているだけであるから、この三ヶ所に見張りを出しておけば敵の侵入はすぐ発見できるので交替に三人が見張りとなり、残りは先生方に対する怒りをぶっつけ合っていた。

ところがこの見張りが逆に先生方に見つけられてしまった。

それとも知らず見張りも呼び入れ、お弁当を食べ皆で昼寝をしていたところ寝耳に水とはこのことである。突然ほっぺたをぶん殴られ、がばと跳ね起きてみると男の先生方がずらりと我々を取囲み、怒りの形相もの凄く我々を睨んでいるではないか。

そのうち、田辺教頭が瘦せ細った体の何処から出てくるか想像もつかない突拍子もなく甲高い声で『全員整列、職員室迄駆け足』と怒鳴った。途端に我々は一目散に学校めがけて走り出し職員室に並んだのである。それからが大変である、先生方が整列している可憐なる小学生達を替る替る鉄拳制裁したのである。特に信一と公男と精一は徹底的に殴られ目が見えなくなるほど顔が張れ上ってしまった。

しかし、この可憐なる少年達は紳士であった。誰一人としてこの大事件を親に告げる者はなく、一方先生方としてはこの非常時にストライキがあったなどと知れたなら校長の首が飛ぶこととなったのではあるまいか。

そんな訳で信一、精一、公男は危険人物視され先生方はろくに声も掛けなくなつた。

二 戦争時代

昭和十七年三月、この危険な少年達も目出度く卒業となった。信一は悪戯もするが勉強も出来たし、家も裕福な方だったので東一とともに岩手県で二番目に古い千厩農蚕学校に入学したが、悪戯こそ天才的に上手であったが勉強のほうはいたって出来が悪く、その上貧乏な精一は家で百姓仕事を手伝うことになった。喧嘩にかけては上級生だろうが下級生だろうが誰一人として大刀打ちできなかった公男は、その後東京に行き、やくざの何とか組に入って腕を磨き天晴な男になったが、のちに何を考え違いをしたのか故郷に帰り今ではひっそりと暮している。

さて私は同じ部落の一級上の孝雄と公平と三人組を作り、毎日順番に三人の家を回っては農作業をした。孝ちゃんも公平も私が卒業する前には組んで働いた訳ではないので私が働き掛けて組を作ったのであろうが、どうも私は組織を作るのが上手だったようである。今、私は大学で集団論を講義しているが私の集団論はストライキ以来の経験を踏まえた上での理論であり、だから学生が毎年千人以上も聴講するのではあるまいか。

私が今でも農作業が出来るのはこの三人組の時代に腕を磨いたからであり、あの當時を懐古してもよく働いたなと感心する。田植も、田の草取りも、稲刈りもいつも三人で働いた。尤も、酒も濁酒であったが随分と呑んだ。煙草も煙管ですばすばと吸っ